



# 関西学院同窓会 大阪支部

## INTERVIEW

http://www.kwangaku-osaka.org

2017.01

探訪記

FILE

No.14

天野酒 醸造元

西条合資会社 会長

西條 和彦氏

昭和26(1951)年 関西学院大学 経済学部 卒業

### ＝ 明日へのヒント ＝

—— 関西学院の予科 ※1 からの「入学と退園  
きしてありますが、その時代、この河内長野でも関西  
学院の名は有りましたのでしょか？」

戦後すぐ……8月20日だったでしょうか。近所の  
小学校の校庭に米軍が駐屯しました。道路補修のため  
のエンジン車達でした。河内長野警察の紹介で将校た  
ちは手土産持参で毎晩お酒を飲みに来ていました。直  
に親しくなったのですが、その話のなかで「君は幾つ  
だ？」「17歳です」「なら間もなくカレッジだね。ど  
こに行くのか？」——そんな話の中で、中尉の人が  
「関西学院」という名を挙げたんです。  
「アメリカ人でも関西学院の名は知っているのか  
と大変興味をもちました。」

当時私は中学4年生。早速担任の教諭に関西学院へ  
の進学について相談に行きました。先生からは「関西  
学院は他の私大の予科と違って数字があるんだ。4年  
修了での受験は無理だ」と言われ、5年を卒業してか  
ら受験しなさいと……。駄目と言われると余計に行っ  
てみたくなりましたね。京都の三高の学生を家庭教師  
として二か月間、それはそれは厳しい特訓が始まりま  
した。まあ、そのおかげで競争率10倍の大学予科に  
合格することが出来ました。そんなのが関西学院との  
出会いだったんですよ。

—— 実際に関西学院に行かれたのは、なぜは？

すばらしい先生達との出会いでした。見玉先生



天野酒 醸造元 西条合資会社 会長  
西條 和彦 (さいじょう かずひこ) 氏

東山先生、そして蛭沼先生。特に二年間お世話になっ  
た蛭沼先生 ※2。あの先生のおかげで私は「生き  
返った」と言っても過言ではありません。

私は皆さんも、存知の終戦前日の爆撃、大阪砲兵工  
廠にあの時 ※3。いた人間の一人なんです。その  
時の傷は今でもこのように残っています(シャツの間  
を見せる)。

当時私の学校からは17名行っていたのですが、生  
き残ったのは4名。それも防空壕に逃げ込むことが出  
来た者が、皆死んでいったという、本当に悲惨なもの  
でした。自分は防空壕に入り切れず、煙突に隠れてい  
たんですが、それで助かったんです。でも生き残って  
「運がある」などと思うような、そんな気分には到底  
なれず、何と言った方がいいのでしょうか。生き残るとい  
うのは、本当にある意味苦しいことなのだと感じまし  
た。

そういつた当時のささくれた気持ちを真つすぐに  
生き返らせてくださったのが、蛭沼先生だったんです  
よ。米軍の兵士に教えられた学校に行つて、戦争で受  
けた傷を治されるというのも不思議ですが、そういう  
た意味でも今強く感じるのは、やはり人というのは  
「縁」によって結ばれ、お互いに生かされているのだ  
なという思いですね。

関西学院の予科というのは、自分にとっても誇り  
でしたね。白い線が学生帽に入っている。あれをかぶり  
たくてね(笑)。当時はここに入りにくいので、皆私  
学を目指す人間は難に行っていました。それだけ関西  
学院は英語が難しかったんです。なんせそれまでは敵  
国語だったので、学校でもきちっとした英語教育を与  
えていなかったんですね。

—— その時何を学んだとお感じになったのでしょ  
う？

学校で学んだこと。その根幹は「人間関係の教育」  
だったように思います。蛭沼先生が大変自分のクラス  
の学生をかわいがってくださったんですよ。

春と秋に毎年学校の行事として旅行に行くのですが、その後に蛭沼先生は特別の補習をしてくださるんです。「自身は英語の先生であるにもかかわらず、「あらゆる教科を持って来なさい」とおっしゃる。半信半疑で持ってくる先生がそれぞれの科目について「試験の山をはって下さるんですよ。しかもそれがきちんと当たる(笑)。一人として脱落者を出してはいけないという思いだったんでしょうね。」

生徒の方はすっかり先生になつてしまいい、色々なプライベートな問題を相談に行くんです。どんなつまらない話でも先生はきちっと向き合っていて、「心配ない」と安心させてくださったんです。こういふことをあの当時の青年は皆求めていたんでしょう。そんな素晴らしい環境で、授業料は関西大学の倍でしたけどね。言い換えるとそれは「大人」の勉強でした。戦後の大人とはどうあるべきなのか—それです。

——「卒業の進路はUSCへ。」

昭和25年8月下旬のこと。突然日立製作所の常務が秘書と運転手の3人で自宅に來られたんです。その時期、日立・東芝・三菱の三社の労働争議が始まりました。その影響で大ストライキが起きたんです。

その常務さんは大阪の北浜で捕まっちゃって、日新生命ビルの屋上でドラム缶の上に座らされて「そこから落ちてひびい怪我をされてね。」

で、その常務さんのおばさんが私の祖母と親しくしていた関係もあって、うちに逃げて來られたんです。そこで天野山・金剛寺に匿ってもらったんです。さすがにお寺に逃げ込めず、面白いもんで連中も追いかけてこなくなりました。10日ほどおられましたね。

その間は毎日番頭と一緒にお弁当を彼に届けに行っていたんですが、最後に秘書の方が出てきて「坊ちゃん、何年生ですか？就職はなされるんですか？」と聞かれる。私自身は交通論を研究



結局昭和30年11月にこちらに戻ってきました。

——「蔵元という仕事、実際に着手なされた時の感想は？」

その当時この近辺に蔵元は15社ありましたが、正直「もつこれは駄目だ」と思いましたね。15社を枕に討死しなければ…えらい業界に入ったなと思えましたよ。

日立で学んできたような企業的な発想など禁句でした。「そんなガタガタいうな。お前らが食べていける分はちゃんと準備出来ているから」とそれはそれはのんびりとした世界でしたよ。案の定と言いますか、昭和50年ごろに、みな無くなつていきました。とことんいつてしまった…という感じですね。

消えていった理由は「品質を追わなかった」の一言ですね。それを追求しないのに販売に力を入れようとしたのが間違いですね。

それと「ネーミングのセンスですね。『天野酒』：平成元年に生み出した名前なんです。これはやはり胸をはれる「業蘊」だと思いますが、でもこのネーミングで私は父から「出ていけ!」と言われたんですよ。父にしてみれば「どうせこの業界は駄目になるのだからバタバタするな。そんなことより少しでも長らえることを考えるべきだ」ということでしょう。土地もあるし、有価証券もあるし…お前が食っていくことは出来るはずだから、そんな発想でしたね。父とは根本的に哲学が違ったのだと思います。

——「天野酒のネーミングはどのように？」

日立にいた頃、東京で一人暮らししてましたよ。休みの日に体を余すので、何か趣味を持たないと、思ってたんです。日立には幸いなことに多くの趣味の会がありました。そこで写真をはじめたんで

す。囑託の指導者として中村立行(※4)がおられた。彼が大変酒好きで、その当時うちの酒をよく一緒に飲んだんです。「うめえな!」と言いつつもその名「波の鶴」を見て「こんな平凡な名は止めるよ」と言ったんです。「どんな名前がいいですか?」「晩考えるわ」…それで色々考えているうちに石川丈山(※5)を思い出して「白鶴」という名にたどり着いたんです。ところが調べてみるとすでに登録されていたんですね。そこでその上に何かをつけようということになり、「老松白鶴」としたら取れたんですよ。

ところが伊丹に老松という名の蔵元があるんですね。そこで邪魔をするわけにはいけないので、これは止めました。

次のきっかけは吉川英治の「私本太平記」がNHKの大河ドラマになったんですね。その時に天野山で僧兵が酒を造っていたという話がクロージアアップされたんです。その酒は後に豊臣秀吉にも気に入られたのですが、そうすると伏見の酒が怒るので、「正月と盆以外は京にこの酒を持ち込んでなんらん」という通達が来る…それほどうまかったです。

で、これは良い話を聞いたと思いい、早速寺に行つたんです。「天野山」の名を使いたいということだね。座主は悪い話ではないし、名前をあげてもいいけれど、使用料を金銭で頂戴することは出来ませんとのことでした。そこで早速富田林務署でこの話してみました。申請の要領によってはお寺でも酒を売ることが出来るが、最終判断は大阪国税局ですという返事。翌日今度は大阪国税局に。

行ってみるとそこに富田林でお世話になった人が酒税の課長をしていたんです。親切に教えていただいて「天野酒」が生まれたんです。やっぱり「縁」ですね。人を欺くことは絶対にしたら駄目ですね。この酒を見るたびに思います。関西学院、蛭沼先生…あの時教わったことが全て一つになって…そんな結晶を見るような思いでこの

酒をいつも眺めています。

——おびんごいさんねだ

※1 予科 大空予科のこと。1918年に公布された大空令および帝国太子官制に基づいて設置された高等教育機関。現在の太子の教養課程に相当する。1955年まで存続した。

※2 蛸沼弄雄（ひるぬま としお） 1914年～2001年。1949年以來関西学院大学に勤務。英文学科に所属。言語学、ギリシア語、ラテン語、英語学などを講義。新約本文批評 など多くの著書を出している。

※3 大阪砲兵工廠は大口径の火砲を主体とする兵器の製造を担当した、アジア最大規模の軍事工場。最大工員数は約6万4000人。「あの日」というのは1945年8月14日午後、約150機のB29による集中爆撃により80パーセント以上の施設が破壊された。構内の死者は382人とされる。

※4 中村喜行（なかむらりつこう） 1912年～1995年。写真家、酒家として有名。酒を断つために夜々できる道楽を探していたところ、飲み屋で借金のかわりに誰かがおいていったカメラを入手して、その道へ。

※5 石川丈山（いしかわ じょうざん） 1583年～1672年。安土桃山時代から江戸初期にいた武人・文人。徳川家の譜代家臣の家系。大坂夏の陣での軍功で以後隠棲。その後浅野家に仕えるが、母が死ぬと隠居して京へ。文人としての生涯を費く。有名な漢詩に「巨魁句」一軍士山 があり、そこに「巨扇倒に懸かる 東海の天」の一文がある。

2016年7月11日

場所：天野酒造元西條合資会社内

取材：中野誠哉／松野雄一

西條 和彦（わいじょう かずひこ）氏

天野酒造元 西條合資会社 会長

1951年 関西学院大学 経済学部 卒業

1951年 株式会社日立製作所 入社

1956年 西條合資会社 入社

~~~~~  
 編集後記  
 ~~~~~

“生き残った苦しみ”については、私も祖父から聞かされたことが、その傷ついた心が、米兵の勧めをきっかけに入学された関西学院で癒やされたというエピソードはとても印象的でした。西條先輩のお話から、縁を大切に、人を欺かないという考えの大切さを学ぶことができました。

編集室長 小島幸保（1995年法経部政治経済学科卒）